二〇二五年度　同朋大学　文学部
学校推薦型選抜（公募）小論文　問題用紙

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。〔　〕は問題作成者が追記した個所である。

そもそも大学は何のためにつくられたのか？　なにをするための場所なのか？　ここではまずそんな基本的な問いから考えていきましょう。

井上ひさしの『ボローニャ紀行』（文春文庫）のなかに、世界最古とされるボローニャ大学のことが書かれています。それはいまの時代からは想像もできない、驚くべき大学の姿です。

初めは、探求心の旺盛な学生たちが街の法学者のもとに集まって勉強していたが、そのうちに噂を聞きつけて、イングランド、ハンガリー、ポーランド、そして欧州のいたるところから学生たちがボローニャへやってきた。彼らは出身地別の学生団体である国民団をつくり、やがてその国民団にそって組合が結成される。それが一〇八八年のことでした。ちなみに、ラテン語のウニウェルシタス（Universitas）は、自治的な組合という意味で、だからユニヴァーシティというのは自治組合のことだったのですね。

学生が管理する大学だから、教授の人選は学生がやる。授業内容も、給料も学生が決める。つまらない講義をする教授や、聴講生の少ない教授からは学生が罰金を取る。それでも改善されなければ、その教授を学生が馘(くび)にする。もちろん、学長も学生から選ばれていました。

世界最古の大学は、いまの大学とはまったく違う場所でした。偏差値のためでも、いい就職をするためでもない。研究者が研究に没頭するための場所でもない。もっと学びたいという学生たちによる、学生たちのための大学だったのです。

時代は違っていても、この学生という学ぶ者たちが中心にいる姿は大学について考えるときのひとつの原点だと思います。そして、いまの大学で学生がサービスを享受するだけの受け身の存在になっているとしたら、大学の機能が麻痺していることのひとつのあらわれかもしれません。

〔中略〕

大学では、授業で聞いた話が他の授業の話と食い違うことがあります。教科書にひとつの模範解答があることに慣れた学生にとっては、戸惑う状況かもしれません。それは、かならずしも教員のあいだで知識の「量」に差があるからではありません。知識を支える枠組みをどのように設定するかで、話が変わってくるのです。

その意味では、「仮のもの」〔※〕の対極に「ホンモノ」があるわけでもない。このことは重要です。どんどん掘り下げていけば、究極の正解に到達するわけでもない。重要なのは、ある情報が他の情報とどのように関係しているかを考えることです。「もっともらしさ」をつくりあげている情報どうしの関連性を見いだすこと。それが、学問の前提になる重要な作業です。たとえば、政党支持率などの世論調査の結果にしても、調査手法が違えば、結果は変わってきます。調査対象が偏らないようにランダムに電話をして調査をするにしても、固定電話にするか、携帯電話も含めるかで、対象者の偏りが変わってきます（若い世代は家に固定電話がない場合が増えているので、固定電話だけにすると回答が高齢世帯に偏る可能性があります）。

なんらかの調査にもとづいた「もっともらしい」と思える結果でも、「正しい」とは限りません。その「正しさ」はつねに検証すべき対象なのです。

そういう意味で、「知識」とは、暗記型のテストで問われるような特定の情報を知っているかどうかではありません。複数の情報の結びつきをとらえ、それらを関連づけながら暫定的な結論を出す。別の情報がみつかれば、結論をどんどん更新していく。それは、おのずと〇か×かという「点」ではなく、考えていく「プロセス」になります。

最近、授業中に課題などを出すと、学生はすぐにスマートフォンを出してネットで調べはじめます。それ自体、別に悪いことではありません。どんなツールであれ、わからないことをすぐに調べる姿勢は大切です。むしろ、そのことは、ある情報を知っていたり、正確に覚えたりしていることが、ますます意味をもたなくなった現状をあらわしているのだと思います。

いまや、いつでもどこでも「情報」は手に入ります。だとしたら、ネットの情報をどのような視点で探しだし、妥当なものを選別し、そこからどうやって自分なりの「答え」を導き出していくか、そのプロセスをうまくできるかどうかが、ますます重要になっていると言えるでしょう。

「問い」には、いくつもの答えがあり、いくつもの答えに至る道筋がありえます。だから、ひとつしかない普遍的な「答え」をその

まま学生に覚えさせることが大学の役目ではありません。さまざまに食い違う情報のなかから、自分にとっての「正解」を探しだす力をつける。

そんな考えるプロセスを大切にする大学で、その学びの最初の関門が、ひとつの正解しかないテストの点数であることは、残念ながらとても皮肉なことなのです。

大学で教えられる「学問」は、それまでの「勉強」と何がどう違うのでしょうか。ネットをそのまま書き写して「うまくやった」と思っている学生をみていると、複雑な気持ちになります。大学の学びとはなにか、もう少し考えていきましょう。

〔後略〕

（松村圭一郎『これからの大学』春秋社、二〇一九年）

※「仮のもの」…この言葉は、「仮の答え」や「暫定的な答え」といった意味で用いられている。

問一　右の文章のうち、線で囲んだ部分について、二〇〇字程度で要約しなさい。

問二　右の文章全体を読んで、高校までの「勉強」との違いを意識しながら、大学での学びや「学問」についてあなたの考えを六〇〇字程度で述べなさい。